

高校生における性行動に関する研究

—高校生が性交を行う動機と性知識を中心に—

五十嵐 哲也

1. 目的

近年、思春期・青年期における性行動が早期化・低年齢化したと言われる(原,2001)。実際、東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会の1999年度調査(東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会,1999)によれば、高校1年生男子の25.0%、高校2年生男子の33.5%、高校3年生男子の37.8%、高校1年生女子の22.1%、高校2年生女子の34.8%、高校3年生女子の39.0%が性交を経験しているとされ、過去の調査よりも確実に高校生における性交経験が増加傾向を示していると考えられる。さらに、女子高校生を中心とした『援助交際』、すなわち若年層を主な売り手とする性の商品化が社会に蔓延・一般化した(宇井・福富,1998)という指摘や、若年層の性行動には、知り合っただけの性交など HIV 感染の危険が高い性行動が含まれている(宗像,1994)という報告がなされている。こうした中、性的逸脱行動や性に関連する健康リスク行動をも視野に入れた性教育の充実が望まれる。

このような性教育について高村(1999)は、「とくにこれからの人生設計を構築している思春期の若者は、その人生設計を見通して Yes, No を主体的に自己決定していく能力」(Pp.18)が重要であると述べている。また斎藤(1998)は、性に関する出来事は、様々なライフイベントに大きく影響しているとした上で、学校教育段階で受けた性教育が、その後のセクシュアリティに長期的な影響を与えていることを実証した。

以上の指摘を鑑みるに、性教育では、人生展望を見据えた上で、いかに実際の性行動を選択し、決定するのかという点が一つの重要な目的であると考えられる。その際、「なぜ性交を行おうとするのか」という点に関する、高校生自身の認知を明らかにすることは重要である。そして、こうした高校生自身の認知に対し、性教育がどのように働きかけることができるのかを検討する必要がある。これまでの研究においても、性交を行おうとしたきっかけや動機に関しては、いくつかの

点が明らかにされている。まず東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会(1999)は、「愛していた」から性交を行ったとする者が男子で46.2%、女子で68.5%と最も多い一方、「遊び・好奇心」(男子24.4%、女子11.1%)、「酒を飲んだうえ」(男子10.2%、女子5.8%)、「ただなんとなく」(男子17.8%、女子13.9%)という結果も示されており、女子は愛情を重視して性交を行うと考えている者が男子よりも多く、男子には衝動的で状況に流されやすい側面が女子よりも多く存在することが示唆されている。また岡田・大草・高安(1997)は、「愛しているからいいと思った」(男子36.2%、女子64.6%)とやはり愛情を動機とする者が多い一方、「一度経験してみたかった」(男子33.5%、女子4.5%)、「その場の雰囲気や気がついたらしていた」(男子21.6%、女子21.2%)と、好奇心や衝動的な側面などについても明らかにしている。

しかし、なぜ高校生が性交を経験するのかという高校生自身の認知は、単一のものではない可能性がある。先行研究においてはこの点に関して言及されておらず、またそれらと性教育との関連性も明らかにはされていない。そこで本研究では、なぜ高校生が性交を経験するのかという高校生自身の認知を、「高校生が性交を行う動機」として把握し、それを測定する尺度を開発した上で、その構造を明らかにする。さらに、「高校生が性交を行う動機」と性教育との関連を検討するために、高校生の有する性知識を取り上げて、「高校生が性交を行う動機」との関連を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

A 県 B 高校生 1・3 年生(男性71名、女性65名)、C 県 D 高校生 1～3 年生(男性161名、女性168名)、E 県 F 高校 3 年生(男性25名、女性55名)、計545名。

A 県は首都圏の通勤圏内にあり、B 高校の 4 年制大学進学率は少なく、約半数が就職する。なお 3 年生に

おいては進学・一般のクラスに分けられているが、調査対象となったのは一般クラスの生徒である。

C 県は首都圏から離れた地方で、D 高校は地方都市の進学校である。就職を希望する生徒は稀で、ほぼ全員が国公立大学・短期大学への入学を希望する高校である。

E 県は首都圏からやや離れた位置にあり、調査対象となったのは、F 高校の職業系専門学科に在籍する生徒である。

2. 調査内容

学年、年齢、性別を尋ねた後、以下の32項目について質問した。

(1) 高校生が性交を行う動機に関する質問

1999年6月中旬～下旬に回想法・一部郵送法により大学生・大学院生34名を対象とした自由記述式の予備調査から得られた結果を、心理学専攻の大学院生3名により同年7月中旬にKJ法により処理し、さらにそれを同年9月上旬に心理学専攻の大学院生2名と内容及びワーディングなどに関して検討した上で選定された質問項目21項目からなる。なお、性交未経験者には想像して回答するよう求めた。「あてはまる～あてはまらない」の4件法。

(2) 性知識に関する質問

門本・大木・ト部(1998)の性知識問題を使用した。門本・大木・ト部(1998)は20項目であるが、その際に得られた正答率から、高得点・低得点の項目より各5項目、計10項目を使用することとした。「正しい・間違い」の2件法。

(3) 性交経験の有無

性交を行ったことがあるか否かについて、2件法により質問した。

3. 調査手続

1999年12月上旬～中旬に、無記名の質問紙法による一斉調査を実施した。調査実施は、協力者である授業

担当教師に依頼した。なお、回答にあたっては、プライバシーが保護されること、協力したくない場合や答えたくない質問には答えなくてよいことが調査実施者を通じて確認された。

III. 結果

1. 性交経験について

まず、学年及び性別ごとの性交経験者数を Table 1 に示す。性交経験者数と未経験者数の比較を行うために χ^2 検定を行ったところ、学年ごとの性交経験に有意差が見られた ($\chi^2(1) = 55.46, p < .001$)。

2. 高校生が性交を行う動機の因子分析結果及び下位尺度相関

次に、高校生が性交を行う動機についてその構造を把握するために、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行うこととした。因子分析に先立ち、平均値や度数分布の偏りについて項目分析を行い、全ての項目において偏りが見られなかったため、21項目による因子分析を行った。その結果、共通性が低い項目や、因子負荷量.35以上の基準でどの因子にも負荷しない項目が見られたため、これら5項目を削除し、再度16項目について因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った(Table 2)。

第I因子は、「相手のことをもっとよく知りたい」「相手との心の距離を近づけたい」「相手に自分の愛情を伝えたい」などの5項目であり、性交の相手との関係性における愛情について示すものであると考えられるため、「愛情」因子と命名した。

第II因子は、「友人より先に経験したい」「兄弟姉妹がしているから自分もしたい」「自分だけしていないのはいやだ」などの5項目であり、自分の周囲の人間の経験との比較について示すものであると考えられるため、「周囲との比較」因子と命名した。

第III因子は、「体験してみたい」「結婚前の性行動は別にかまわない」「性行動の経験に関する話が友人と盛

Table 1 学年及び性別ごとの性交経験者数 (%)

		性交経験者	性交未経験者	N.A.
学年	1年生	27 (14.36)	135 (71.81)	26 (13.83)
	2年生	15 (14.15)	73 (68.87)	18 (16.98)
	3年生	105 (41.83)	109 (43.43)	37 (14.74)
性別	男子	77 (29.96)	150 (58.37)	30 (11.67)
	女子	69 (23.96)	167 (57.99)	52 (18.06)

Table 2 高校生が性交を行う動機尺度の因子構造(バリマックス回転後)

	I	II	III	IV	共通性
I 愛情 ($\alpha = .89$)					
相手のことをもっとよく知りたい	.81	.06	.12	.00	.68
相手との心の距離を近づけたい	.79	.02	.18	-.05	.66
相手に自分の愛情を伝えたい	.76	.12	.12	-.03	.62
より身近に相手を感じたい	.75	.04	.29	-.03	.65
相手の愛情を確認したい	.71	.16	.21	.03	.57
II 周囲との比較 ($\alpha = .81$)					
友人より先に経験したい	.03	.77	.27	.14	.68
兄弟姉妹がしているから自分もしたい	.01	.76	-.03	.06	.59
自分だけしていないのはいやだ	.10	.75	.29	.18	.69
兄弟姉妹に影響されている	.14	.57	-.11	-.01	.35
友人にかっこいいと思われたい	.12	.48	.26	.14	.33
III 安易な考え ($\alpha = .70$)					
体験してみたい	.31	.31	.67	.11	.66
結婚前の性行動は別にかまわない	.32	.00	.54	-.01	.40
性行動の経験に関する話が友人と盛り上がる	.33	.18	.50	.05	.39
IV 焦燥感 ($\alpha = .58$)					
自分だけしていなくても恥ずかしくない*	-.09	.30	-.01	.64	.51
友人と比べてあせりはない*	-.03	.20	-.05	.60	.41
まだ年が若すぎる*	.05	-.17	.25	.47	.31
因子負荷量平方和	3.30	2.62	1.49	1.08	
説明率(%)	20.64	16.36	9.32	6.78	
累積説明率(%)	20.64	37.00	46.32	53.10	

* 逆転項目

り上がる」という3項目であり、性交を経験することに対する明確な動機を持っているわけではなく、安易に、「性交を経験することに興味があるから」「別にいいと思うから」という考えを示すものであると考えられるため、「安易な考え」因子と命名した。

第IV因子は、「自分だけしていなくても恥ずかしくない」「友人と比べてあせりはない」「まだ年が若すぎる」(全て逆転項目)という3項目であり、第II因子と類似しているが、ここでは明確な焦りを示す項目が示されていると考えられるため、「焦燥感」因子と命名した。

尺度の信頼性を検討するためにChronbachの α 係数を算出したところ、 $\alpha = .58 \sim .89$ の範囲であったため、十分であると考えた。

なお、各下位尺度間の相関係数を算出したところ、

「愛情」と「焦燥感」においては相関が認められなかったが、その他の下位尺度間には.13～.54の有意な正の相関が見られた。

3. 高校生が性交を行う動機及び性知識の性差・学年差

高校生が性交を行う動機及び性知識における性差、学年差を検討するために、性別と学年を要因とする2要因分散分析を行った(Table 3)。

その結果、「周囲との比較」「安易な考え」において性別の主効果が見られ、男子の得点が有意に高かった。

また、「愛情」「安易な考え」「焦燥感」、及び性知識において学年の主効果が見られたため、Tukey法による多重比較を行ったところ、「愛情」においては2年生・

Table 3 高校生が性交を行う動機及び性知識の性差・学年差

		性交を行う動機				性知識	
		愛情	周囲との比較	安易な考え	焦燥感		
男子	1年生	<i>M</i> (<i>SD</i>)	2.81 (.77)	1.91 (.63)	2.78 (.79)	2.25 (.91)	.63 (.15)
	2年生	<i>M</i> (<i>SD</i>)	3.05 (.69)	2.10 (.81)	2.97 (.75)	2.04 (1.13)	.73 (.12)
	3年生	<i>M</i> (<i>SD</i>)	3.08 (.77)	1.84 (.76)	3.01 (.89)	2.43 (.93)	.69 (.15)
	1年生	<i>M</i> (<i>SD</i>)	2.89 (.88)	1.53 (.61)	2.63 (.94)	2.07 (1.07)	.63 (.15)
	2年生	<i>M</i> (<i>SD</i>)	3.05 (.58)	1.65 (.61)	2.54 (.73)	1.89 (.90)	.68 (.15)
	3年生	<i>M</i> (<i>SD</i>)	3.17 (.67)	1.77 (.68)	2.86 (.74)	2.39 (.97)	.71 (.14)
主効果	性別	<i>F</i> 値	.73	22.34 ***	10.21 **	1.91	.88
	学年	<i>F</i> 値	7.27 ***	1.70	4.58 *	8.41 ***	12.81 ***
交互作用		<i>F</i> 値	.12	3.80 *	1.24	.29	2.42 †

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

3年生 > 1年生であり、「安易な考え」及び「焦燥感」においては3年生 > 1年生・2年生であり、性知識においては1年生 > 2年生・3年生であった。

さらに、「周囲との比較」と性知識において交互作用が見られたため、性別と学年によって調査対象者を群分けし、それを要因とする1要因分散分析を行ったところ有意差が認められ(「周囲との比較」: $F(5, 531) = 5.59, p < .001$, 性知識: $F(5, 519) = 6.00, p < .001$), Tukey法による多重比較の結果、「周囲との比較」においては男子2年 > 女子2年 ($p < .05$), 男子1年 ($p < .01$)・男子2年 ($p < .001$)・男子3年 ($p < .05$) > 女子1年であり、性知識においては男子2年・女子3年 > 女子1年 ($p < .01$), 男子2年・女子3年 > 男子1年 ($p < .01$)であった。

4. 高校生が性交を行う動機及び性知識の性交経験の有無による差

高校生が性交を行う動機及び性知識における性交経験の有無による差を検討するために、性交経験の有無

を要因とする1要因分散分析を行った(Table 4)。

その結果、「愛情」「安易な考え」「焦燥感」及び性知識において有意差が認められ、いずれも性交未経験者より性交経験者の得点が高かった。

なお、性交経験の有無と性別、及び性交経験の有無と学年の2要因分散分析をそれぞれ行ったが、有意な交互作用は認められなかった。

5. 高校生が性交を行う動機における、性知識高低群による差

高校生が性交を行う動機におけるどのような側面において、有している性知識の多少により差があるかを検討するために、性知識得点の高低により調査対象者を群分けし、それを要因とする1要因分散分析を行った(Fig.1)。調査対象者の群分けは、平均値±標準偏差という基準で行った。

その結果、「愛情」($F(1, 139) = 13.05, p < .001$)、「安易な考え」($F(1, 137) = 6.84, p < .01$)において、性知識高群の方が低群に比べ得点が高かった。

Table 4 高校生が性交を行う動機及び性知識の性交経験の有無による差

	性交経験者		性交未経験者		F 値
	M	(SD)	M	(SD)	
<u>性交を行う動機</u>					
愛情	3.28	(.73)	2.97	(.72)	19.28 ***
周囲との比較	1.83	(.74)	1.78	(.69)	.50
安易な考え	3.21	(.78)	2.69	(.82)	41.07 ***
焦燥感	2.39	(.90)	2.14	(1.04)	6.16 *
<u>性知識</u>					
	.70	(.14)	.67	(.15)	5.11 *

* $p < .05$ *** $p < .001$

また、性知識の高低に加え、性別を要因とする2要因分散分析を行ったところ、「焦燥感」において交互作用が見られた($F(1,139)=3.95, p < .05$)。そこで、性知識の高低と性別によって調査対象者を群分けし、それを要因とする1要因分散分析を行ったが有意差は認められなかった。

さらに、性知識の高低と性交経験の有無を要因とする2要因分散分析を行ったところ、「愛情」において交互作用が見られた($F(1,125)=4.64, p < .05$)。そこで、性知識の高低と性交経験の有無によって調査対象者を群分けし、それを要因とする1要因分散分析を行ったところ有意差が認められた($F(3,122)=8.60, p < .001$)。Tukey法による多重比較の結果、性交経験のある性知識高群 > 性交経験のない性知識高群 ($p < .01$)・性交経験のある性知識低群 ($p < .01$)・性交

経験のない性知識低群 ($p < .001$)であることが示された。

6. 高校生が性交を行う動機における、性知識項目ごとの正解・不正解による差

高校生が性交を行う動機のどのような側面が、具体的にどのような性知識を有している、もしくは有していないことによって差があるのかを検討するために、性知識各項目の正解・不正解によるt検定を行った(Table 5)。なお、性知識各項目内容は Appendix 1 に示す。

その結果、2「コンドームを使う時、射精直後にペニスを抜くと破れたりして危険なので、しばらくたってから抜くとよい」、3「妊娠人工中絶は、外から見てお腹が目立たない程度までならできる」、8「女性ができる避妊法は、基礎体温を測ることだけである」、9「妊

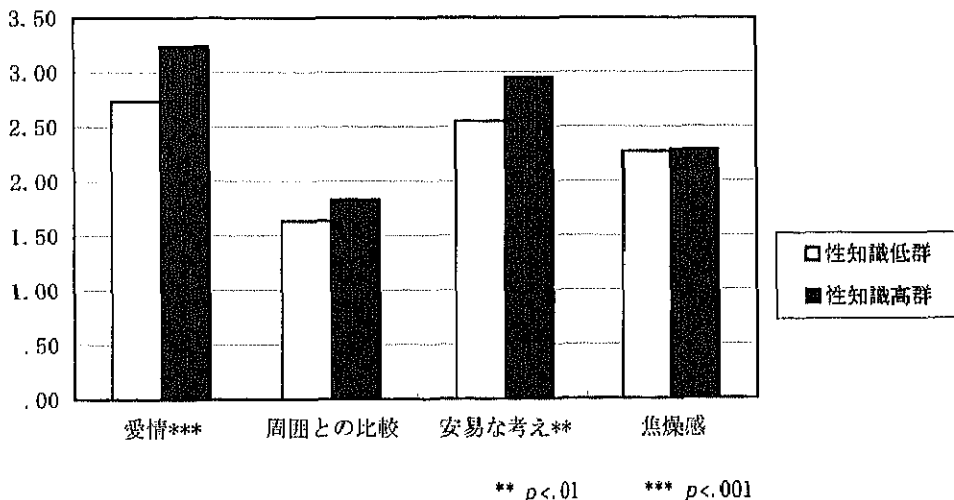


Fig. 1 性知識高低群による高校生が性交を行う動機の差

Table 5 高校生が性交を行う動機における性知識項目ごとの正解・不正解による差

		愛情			周囲との比較			安易な考え			焦燥感		
		M	(SD)	t 値	M	(SD)	t 値	M	(SD)	t 値	M	(SD)	t 値
1	正解	3.12	(.72)	4.65	1.85	(.69)	1.58	2.98	(.77)	5.84	2.27	(.95)	.87
	不正解	2.74	(.79)	***	1.73	(.70)		2.48	(.82)	***	2.17	(1.07)	
2	正解	3.07	(.77)	1.14	1.84	(.70)	.21	2.88	(.79)	.25	2.25	(.99)	.00
	不正解	2.99	(.71)		1.83	(.67)		2.87	(.84)		2.25	(.97)	
3	正解	3.03	(.74)	-.01	1.82	(.73)	.47	2.86	(.80)	.08	2.20	(.98)	-1.24
	不正解	3.03	(.81)		1.79	(.64)		2.85	(.87)		2.31	(.98)	
4	正解	3.08	(.73)	6.12	1.80	(.69)	.05	2.88	(.81)	3.53	2.45	(1.09)	-1.21
	不正解	2.25	(.87)	***	1.79	(.70)		2.33	(.78)	***	2.22	(.98)	
5	正解	3.10	(.79)	1.61	1.88	(.73)	1.88	2.96	(.78)	2.24	2.27	(1.00)	.66
	不正解	2.99	(.74)		1.76	(.68)	†	2.79	(.84)	*	2.21	(.98)	
6	正解	3.06	(.74)	4.32	1.81	(.70)	.59	2.88	(.80)	3.14	2.23	(.97)	-.15
	不正解	2.19	(.95)	***	1.70	(.73)		2.19	(.98)	**	2.29	(1.33)	
7	正解	3.06	(.72)	3.07	1.82	(.69)	1.09	2.87	(.79)	2.25	2.24	(.97)	-.65
	不正解	2.31	(1.09)	**	1.64	(.71)		2.28	(1.14)	*	2.39	(1.22)	
8	正解	3.04	(.76)	.41	1.82	(.68)	.35	2.87	(.82)	1.54	2.24	(.98)	1.50
	不正解	2.98	(.57)		1.77	(.74)		2.61	(.78)		1.93	(1.09)	
9	正解	2.95	(.87)	-1.22	1.85	(.70)	.61	2.75	(.84)	-1.65	2.32	(1.07)	.95
	不正解	3.06	(.71)		1.81	(.68)		2.90	(.81)		2.21	(.96)	
10	正解	2.89	(.78)	-4.40	1.75	(.68)	-2.52	2.63	(.81)	-6.41	2.16	(1.04)	-1.85
	不正解	3.18	(.70)	***	1.91	(.69)	*	3.09	(.75)	***	2.32	(.91)	†

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

娠人工中絶には、保険証が必要である」という避妊に関係する項目の正解・不正解による差は見られなかった。また、10「男性に乳房を触られると、女性の乳房は大きくなる」という俗説に関する質問では、性知識高低群による差の検討では有意な差が見られなかった。「周囲との比較」、「焦燥感」においてもそれぞれ有意差もしくは有意傾向が認められた他、「愛情」、「安易な考え」においても有意差が見られ、正解者より不正解者の得点が高かった。

IV. 考察

本研究では、「なぜ高校生が性交を行うのか」、すなわち高校生が性交を行う動機に関する高校生自身の認知に焦点を当て、その構造を明らかにするとともに、その性差及び学年差、さらに性知識との関連を検討した。

まず、性交経験者数は東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会(1999)や五十嵐(2001)などの調査結果とほぼ一致しており、本研究における結果は、妥当性があると考えられる。

また高校生が性交を行う動機は、「愛情」「周囲との比較」「安易な考え」「焦燥感」の4因子構造からなり、一部を除いてその下位構造は関連しあっていた。これは東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会(1999)や岡田・大草・高安(1997)が示したような単純な構造ではなく、複雑に関連しあいながら性交を行う動機が高校生自身に認知されていることを示している。また、「周囲との比較」「焦燥感」はいずれも他者との比較によって左右されるものであると考えられるが、高校生の性交経験には、「愛情」のような単に性交の相手との対人関係の問題のみならず、友人などのその他の対人関係の影響が強いことをあらためて指摘できる。

次に、高校生が性交を行う動機及び性知識の性差を検討したところ、「周囲との比較」「安易な考え」において男子の得点が高いという結果が得られた。これは、東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会(1999)や岡田・大草・高安(1997)でも同様の結果が示されており、男子は性交を経験することについてあまり深く考えず、周りの人との比較によって性交を行おうとする傾向が強いということが示唆される。また特に「周囲との比較」については、Kinsman, Romer, Furstenberg, & Schwarz (1998)が男子に性交経験者が多いとした上で、友人が性交を経験していると認知している者ほど性交を経験しており、性交を経験することが仲間から尊敬を集めることになるという規範を強く感じている者に性交経験者が多いことを示している。これは友人の性交経験に関する話を聴取することによって性交を経験するきっかけとなる様相を端的に示していると言える。またこれは同時に、友人グループに存在する規範意識が性交経験に強く影響することを明らかにしている。日本でも、卜部・大木・百瀬(1996)が、男子高校生の中には「成人までに性交を経験することが最もよい」という規範意識が存在していることを明らかにしており、本研究の結果もこうした規範意識が関連している可能性がある。したがって性教育においては、高校生自身の中にある周囲との比較やそれによる焦りの感情、友人グループの中にある規範意識を取り上げ、積極的に高校生自身に考えさせていくことが望まれる。

しかし一方、「愛情」については性差が見られないという結果が得られた。東京都幼・小・中・高・心障性教育研究会(1999)は性差についての実証的検討を加えていないが、明らかに女子の方が「愛しているから」性交を行ったとする者の割合が高く、本研究の結果はこれに一致していないと言える。この点については、本研究における「愛情」が親和動機に近い項目を多く

含んでいるためであると考えられ、単に「愛している」というだけではない親和動機としての「愛情」については、性別に関係なく認知されていると言える。

さらに高校生が性交を行う動機及び性知識の学年差については、「愛情」においては2年生・3年生>1年生であり、「安易な考え」及び「焦燥感」においては3年生>1年生・2年生であるが、性知識においては1年生>2年生・3年生であるという結果が得られた。高校生が性交を行う動機では、「周囲との比較」以外の下位尺度において高学年の得点が高くなる傾向にあり、今後、大学生やそれ以降の発達段階にある者にも調査対象を拡げ、発達の検討を行う必要があると考えられる。また性知識は1年生の得点が最も高いという結果が得られたが、こうした性知識についてはマスメディアや友人との会話などを情報源としている可能性がある(e.g., 入谷・木村・野地・山本・下村, 2000)。今後は、これらの性知識をどのような情報源から入手しているかも合わせて検討していく必要があるだろう。

また、高校生が性交を行う動機及び性知識の性交経験の有無による差については、「愛情」「安易な考え」「焦燥感」及び性知識において、いずれも性交未経験者より性交経験者の得点が高いという結果が得られた。しかし、門本・大木・卜部(1998)は性知識と性交経験に関して男子非行少年と一般男子高校生の比較を行い、男子非行少年の性交経験率の方が高いとした上で、性知識は一般男子高校生の方が有意に高いという、本研究の結果とは異なった結果を示している。この点について門本・大木・卜部(1998)は、情報に対する関心度や自らの持つ性知識に関する評価という問題を指摘しているが、本研究の結果は、性交を経験したことにより実感を伴って動機を選択したり、性知識について積極的に情報収集したり身につけられるようになった可能性を示唆するものと考えられる。今後は、こうした情報に対する関心度や希求度、摂取度などについても明らかにしていく必要があるとともに、この点については一方で、性交を経験する前の段階ではこれらについて考える経験や積極性が乏しい可能性を示唆していると考えられる。性教育では、性交を経験する前の段階から、これらについて取り組む機会を提供する必要がある。また、性交経験者についても「経験してみたいから」経験したなどと考えている者が多いことから、性教育においてロールプレイやピアカウンセリングなどによる心理的側面に焦点を当てた援助が必要となると考えられる。ただし、高村・岩崎・阿部・菊地(1999)などのピアカウンセリング実践報告にあるように、性

交経験に関する心理的側面に焦点を当てた性教育では、ロールプレイなどによる男女の性に対する意識の違いの理解や、性交の相手と避妊や性交を行うことについての話し合いスキルの育成などに目的を置くものが多い。しかし本研究では、高校生が性交を行う動機において「愛情」得点が高い者は性交経験者に多い一方で、「安易な考え」や「焦燥感」得点が高い者も性交経験者に多いという結果が得られている。したがって、性教育で性交経験に関する心理的側面に焦点を当てると、単に性交の相手との関係性を考えさせるだけではなく、そもそもその時点で性交を経験することに対してどのような考えを持っているのかにまで踏み込み、焦りの気持ちを認識させることも重要であろう。

そして、性知識と高校生が性交を行う動機との関連については、性知識得点が高い者の方が「愛情」、「安易な考え」を動機にあげるものが多く、特に「愛情」については、性交経験のある性知識高群が最も得点が高いという結果が得られた。したがって、ここで取り上げた性知識について学習することによって、性交の相手との関係性を踏まえて性交経験を選択する可能性が示唆される。また、さらに性知識の項目ごとの検討を行ったところ、避妊に関係する項目の正解・不正解による差は見られない一方、「男性に乳房を触られると、女性の乳房は大きくなる」という俗説に関する質問では、性知識高低群による差の検討では有意な差が見られなかった「周囲との比較」、「焦燥感」においてもそれぞれ有意差もしくは有意傾向が認められ、正解者より不正解者の得点が高いという結果が得られた。特に俗説の誤りを信じている者に「周囲との比較」、「焦燥感」得点が高い者が多いということは、友人やマスメディアなどによって摂取した誤った情報を「正しい」と考えている者ほど、周囲の性交経験を気かけやすく、焦りの気持ちが強くなりやすいということが示唆される。堀・松井(1982)は、マスコミ信用度によって高校生をマスコミ信用群・不信群に分け、マスコミ信用群の方が不信群に比べ、同年代の高校生の性交経験率を多く推測していることを明らかにし、マスコミの情報を鵜呑みにしやすい者は「周囲の者からとり残されないように、自分も体験しなければならないのではないかと考えやすい」(p.146)と述べている。本研究の結果は、この堀・松井(1982)の指摘を支持すると考えられ、俗説なども取り上げて適切な知識を指導することが性教育において重要であると指摘できる。また、こうした氾濫する性情報の中から適切な情報を選択する能力や態度の育成も、性教育で扱っていく必要があ

ると考えられる。

また今後は、高校生が性交を行う動機とあわせて、性交を経験した後の感情に焦点を当て、高校生における性行動の多様な側面を明らかにする必要がある。さらに、本研究では友人関係の影響の強さが指摘されたことから、具体的な友人関係の形態や友人間でなされる性に関する会話や情報提供、さらにそれらの満足度などを取り上げて検討することが重要であると考えられる。また、本研究では高校生を対象としたが、この結果が高校生に特徴的なものであるか否かを明らかにするためにも、今後は調査対象の年齢層をさらに拡げることが必要である。

謝辞

本研究のように、性行動経験を質問する調査の実施は極めて困難であると言えるが、一方で性教育の必要性を感じ、積極的に取り組もうという学校や教師の存在があることも事実である。このような困難な状況の中で、調査実施に快くご協力していただきました先生方と生徒の皆さんに、心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 原純輔 2001 「青少年の性行動全国調査」の問いかけるもの 財団法人日本性教育協会(編) 「若者の性」白書—第5回— 青少年の性行動全国調査報告—小学館, Pp7-22.
- 堀洋道・松井豊 1982 高校生の性が問いかけるもの 高校教育展望, 7(9), 140-150.
- 五十嵐哲也 2001 高校生および大学生の HIV 感染予防行動に関する研究—性教育における HIV 感染予防プログラム開発のための基礎的検討— 筑波大学大学院教育研究科修士論文(未公開)
- 入谷仁士・木村龍雄・野地照樹・山本和代・下村美佳子 2000 高校生の性意識及び性行動に関する研究—性交経験の有無と性に関する知識のニーズ及び悩みについて— 学校保健研究, 42, 245-255.
- 門本泉・大木桃代・ト部敬康 1998 男子非行少年のセクシャリティ—行動・知識・意識面からの一考察— 犯罪心理学研究, 36, 23-32.
- Kinsman, S., Romer, D., Furstenberg, F., and Schwarz, D. 1998 Early sexual initiation: The role of peer norms. *Pediatrics*, 102(5), 1185-1192.
- 宗像恒次 1994 エイズ—心の時代への扉 明石出版
- 岡田守弘・大草正信・高安睦美 1997 中学生・高校生の男女交際と性的衝動との関係について—横浜地

- 域での調査をもとにして— 横浜国立大学教育紀要,37,37-63.
- 斎藤誠一 1998 小・中学校で受けた性教育がセクシュアリティ形成に与える長期的効果の検討—大学生のセクシュアリティ形成に着目して— 日本=性研究会議会報,10(1),18-29.
- 高村寿子 1999 性の自己決定能力 松本清一(監修)性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング 小学館, Pp.14-18.
- 高村寿子・岩崎将登・阿部享江・菊地裕子 1999 仲間というキーパーソンが行うピアカウンセリングの有効性—高校生への事前・事後の質問紙調査を通して 松本清一(監修)性の自己決定能力を育てるピアカウンセリング 小学館, Pp.141-153.
- 東京都幼稚園・小・中・高・心障性教育研究会 1999 1999年調査児童・生徒の性—東京都幼・小・中・高・心障学級・養護学校の性意識・性行動に関する調査報告— 学校図書
- 宇井美代子・福富護 1998 「援助交際」に対する女子高校生の意識 東京学芸大学紀要第1部門,49,93-101.
- 卜部敬康・大木桃代・百瀬泉 1996 性行動に関する規範の研究 日本教育心理学会第38回総会発表論文集,30

Appendix 1 性知識質問項目

No.	項目
1	射精しなくても興奮期などに男性のペニスからしみ出る液体にも精子が含まれている
2	コンドームを使う時,射精直後にペニスを抜くと破れたりして危険なので,しばらくたってから抜くとよい
3	妊娠人工中絶は,外から見てお腹が目立たない程度までならできる
4	女性の身体の「排卵」というものが,妊娠に深く関係している
5	女性が月経(生理)中に妊娠することもある
6	性欲は,男性にも女性にもある
7	コンドームには,避妊と病気の予防という二つの目的がある
8	女性ができる避妊法は,基礎体温を測ることだけである
9	妊娠人工中絶には,保険証が必要である
10	男性に乳房を触られると,女性の乳房は大きくなる

A Study on Sexual Behavior among Senior High School Students :

Focusing on the Motive for the Senior High School Students' Experience of Sexual Intercourse and Knowledge about Sex

Tetsuya Igarashi

This study had investigated for purposes to explain the relationship between the motive for the senior high school students' experience of sexual intercourse and knowledge about sex.

The results were as follows:

- (1) The motive for the senior high school students' experience of sexual intercourse scale consisted of following 4 sub scale : "affection", "comparison with their around friends and acquaintances", "easygoing way of thinking", and "feelings of impatience".
- (2) Males scored significantly higher than females on "comparison with their around friends and acquaintances" and "easygoing way of thinking".
- (3) The upper grade students scored significantly higher than the lower on "affection", "easygoing way of thinking", and "feelings of impatience". On the other hand, the lower scored significantly higher than the upper on knowledge about sex.
- (4) Students who experienced sexual intercourse scored significantly higher than who did not experience on "affection", "easygoing way of thinking", "feelings of impatience", and knowledge about sex.
- (5) Students who have much knowledge about sex scored significantly higher than who have little on "affection" and "easygoing way of thinking". On the other hand, students who have wrong knowledge about sexual popular view scored significantly higher than who have right on "comparison with their around friends and acquaintances" and "feelings of impatience".

It seems that senior high school students' sexual intercourse was strongly affected by relationship with not only sexual partner but also their friends and acquaintances. Especially, male students indicated that they considered less about experience of sexual intercourse, and have intercourse as compared with their around friends and acquaintances. And, students who have wrong knowledge about sexual popular view were easily worried about their friends' or acquaintances' experience of sexual intercourse and felt impatient.

So, in sexual education, it is expected to make students think about "comparison with their around friends and acquaintances" and "feelings of impatience", especially not only relationship with sexual partner, but also what experience of sexual intercourse is. It is also important to educate appropriate knowledge by taking up a sexual popular view, and to cultivate ability and attitude to select correct sexual information from various.